

高2、中1、年長と3人の子供がいるが、皆、歯医者に行ったことはない。幼稚園や学校での歯科検診で「むし歯の初期症状が疑われる歯がある」となったことはあったが、受診しないまま、次の時には問題なしとなったことはある。

だいたい、「疑われる歯がある」としながら、どの歯なのか記されていないのは何故なのだろう。どの歯が分かれば、素人なりに確認しようと思っているが、それができない。たくさんある歯科医院への受診者を増やすために、とにかく受診させたいのではないか。受診して「虫歯でない」と否定されても、検診を恨むことなく、患者は喜び、歯医者にとっても都合だからではないか。患者の自己負担は補助などあり僅かだが、X線検査では放射線を浴びるなど不必要に不自然な処置を受けることになる。どの歯であるかぐらいは明示して、検診の責任を果たして欲しい。

子供たちにはだらだら間食をさせず、バランスのとれた食事、適度な運動・睡眠、そして夕食後の歯磨き粉を使わない歯磨きという具合に、虫歯になりそうな生活はさせていない。だから、「疑われる歯がある」では、全歯を目視して、問題なければ、受診しない心づもりになっている。

ところが高2の娘が検診で「歯肉炎」となった。歯茎を見れば、すぐに歯肉炎であることが分った。しかしこれならば、歯の問題というよりからだの問題である。

慢性的な病においては、手足や頭部等の枝葉末節の問題は根幹である体幹部に病の本体がある。体幹部における氣的異常が枝葉末節に波及しているわけである。歯肉炎が外傷に起因するような場合でなければ、体幹部に病の本体があり、からだの他の部分へも影響を及ぼしている。

虫歯もからだの問題ではあるが、より局所的

な度合が強く、一定以上進み、自己治癒力の及ばぬ程度となっていれば、歯科を受診して、処置をしてもらうしかない。

娘の場合、単に歯肉炎を治療するのではなく、歯肉炎を含めた病全体を治療する必要がある。歯科で局所的に歯肉炎を治療しても、病は形を変えて残る。病の本体は居座っていて、再び歯肉炎になったり、他に現れたりする。

娘の歯肉炎は、私が鍼灸治療することにした。

診ると、歯肉はやや赤黒く膨らんでいた。痛みがあったり、歯磨きをした時に出血することがあったりすると言う。瘀血（血毒）であるから、出血してちょうど良い。腫れが強いようなら、刺絡（悪血を出す鍼施術）で積極的に出血させるがその状態ではない。

体幹部を診ると、胸下部（肝臓・横隔膜のある辺り）に邪気とやや熱気がある。肝臓は東洋医学では「血海」と呼ばれる臓器の一つで、血液豊富な臓器である。瘀血の問題に深く関係し、アレルギーやリンパの問題の時にも、胸下部に邪熱がある場合が多い。漢方薬では小柴胡湯類が使う。

娘は小学生までは少しアトピー性皮膚炎があり、水疱瘡の治癒の過程で邪毒が出てしまい、出なくなっているが、まだ胸下部に邪熱を抱えそうな体質は残っていた。それが悪化して今回の事態になっているわけである。

胸下部の邪熱を取り除く鍼を夏休み中に繰り返し行った。次第に表面的には腫れた感じはなくなって来た。夏休み明け、まだ、口唇をめくると赤黒い部分がまだ残っており、胸下部の邪熱もまだ残っているが、本人は腫れた感じはなく、出血もしないと言う。更に治療を続けると、胸下部の邪熱はなくなり、歯肉炎は治癒した。

(2015年9月立秋)

